

# 東北復興日記

124

一ノ蔵マーケティング室長  
山田好恵さん



## 「小高で生きる」情熱感銘

阪神大震災から二十年となった十七日、福島県南相馬市を「東北の美しい未来創造塾」フィールドワークで訪れました。東京電力福島第一原発から二十キロ圏内にある小高区は、住民の立ち入りが制限されていた地域で、来年四月

の住民の完全帰還を目指して、インフラ整備や除染作業が進められています。

震災前には約一万三千人の暮らしがあつたその町は、時々トラックが往来するものの、住む人のない家々は風雨にさらされて、無音、無温の世界。そんな中、故郷を何とかしたいと孤軍奮闘している人々と再会しました。NPO 浮船の里代表の久米静香さんは言います。「あの日以来、泣いて泣いて、考えて、ここに戻ることを決めました。そして、戻りたいと思っっている人を、毎日ここで待っています」と写真、小田嘉子さん撮影。



避難指示解除に向け、新たな町づくりのために「小高ワーカーズベース」というシェアオフィスを設立した青年・和田智行さんは、ここを訪れる人々のために「おだかのひるごはん」という食堂をつくりました。

住む人のない町に一人で花を植える双葉屋旅館の小林友子さん。水道も復旧していないのに井戸から水をくみ、花を咲かせて美しい色を生みました。寺内塚合の仮設住宅

では、小高から避難した広畑裕子さんが小石拾いから始めた「のらとも農園」が、今ではビニールハウスも備え、安全な土を購入し、たぐさんの

花の苗を育てていました。

私は頬を打たれたような衝撃を受けました。一体何人の人が戻って来るというのだろう。それでもここで生きると決めた彼女らの決意の強さは、ある意味マイノリティーと分類されるかもしれない。もはや東電への恨みや、災禍による深い悲しみも全て自分で引き受けたように見えるすがすがしいほどの笑顔に安心させられる一方で、同じ被災地に住む者として自分はまだまだだと焦りにも似た気持ちにさせられました。

この連載は、東京のNPO法人JKSKと、被災地の女性たちが協力して復興に取り組む「結プロジェクト」の協力を得て、掲載しています。